音楽の「語り方」
－自分を着飾るための音楽－

小原愛美

「好きなアーティストを教えてください」という質問は、日常の会話や自己紹介、企業の採用面接など、相手のことを知りたい場面で日常的に行われている。しかし様々な理由から、正直に好きなものを答えないという人がいる。筆者はその理由に注目し、音楽についての会話を通して、若者の自己表現の特徴を明らかにしていく。

本論文では、次の 3 点について調査した。①若者の音楽視聴状況、②好きなアーティストについて、③カラオケで歌うアーティストについてである。学生を対象に 51 名にアンケート調査を行い、さらに 5 名の方にインタビュー調査を行った。

調査の結果から、音楽に関する会話は日常的に行われていたが、好きなアーティストについて正直に答えない人や、カラオケで好きなアーティストを歌わない人が多くいた。その理由として、「相手の趣味に合わせる」ことや「相手が知らないものを避ける」ことがあげられた。自分のことを知ってもらうことよりも、会話の相手に自分を合わせていることがわかる。また、ミーハーだと思われることや、カラオケでの盛り上がりを気にしている人がいた。これらのことから、音楽の会話やカラオケを通して、相手からの見られ方を意識していることが明らかになった。

しかし、会話の相手が自分の好きなものを知っていることが確認できると、自分の好きなものを正直に話すという若者の会話のパターンが見受けられた。自分の話をするまでにいくつかの段階を踏んでおり、現代の若者は自分の話をする際、相手の様子を伺いながら慎重に、そして段階的に会話を進めていると結論づけられる。

また、好きなアーティストについて回答してもらったところ、メンバー全員が男性のロックバンドが最も人気で、メンバー全員が女性のロックバンドは回答が無かった。ロックは「男の美学」を実現するための共同体であると先行研究が示していたように、大型ロックフェスにおいても大半の出演者は男性のロックバンドであった。音楽業界、特にロックというジャンルにおいて、今もなお男性優位の社会になっていることを明らかになった。